The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	序論 : Interactive competence の観点から『日葡辞書』(1603-1604) の現代語化を考える
Author(s)	林田, 雅至
Citation	Co＊Design. 2017, 2, p. 59-69
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/65081
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【研究ノート】

序論：Interactive competenceの観点から『日葡辞書』（1603-1604）の現代語化を考える

林田雅至（大阪大学COデザインセンター）

ポルトガル語圏文献学・キリスト教図像解釈学・宗教民俗学を専攻する学際研究者（ポルトガル語学・文学）。ポルトガル・リスボン科学アカデミー（外国人会員）。

Introduction to Linguistic Modernization of *Vocabulário da Língua do Japão(Vocabulary of the Language of Japan), 1603-1604*, from the viewpoint of interactive competence

Masashi Hayashida
(Center for the Study of Co* Design, Osaka University)

2016年、日本イエズス会による刊本『日葡辞書』（長崎版、1603-1604）を網羅的に分析し、収録される語彙のポルトガル語解説を通じて、イエズス会宣教師たちの日本理解を俯瞰的に捉えようと試み、仏教と神道の神仏習合の抽象的な理論解釈の問題などを、個別の祝祭――難（鬼）遣らい、節分、七夕など――を通じて分析を進め、様々な同音異義語を通して、日本文化に関するイエズス会宣教師の理解の濃淡を観察した。

その研究過程で、従来の外国語学習――学習対象言語・文化・社会などへの全面的統合を是とする考え方――のアンチテーゼとして、母語・外国語「双方向運用能力」の涵養こそ、グローバル化時代の「高度汎用力」に合致するものとする立場から、その汎用力を習得することに資する『日葡辞書』の中・近世ポルトガル語・日本語、両言語の現代語化作業を実践するための序論である。

キーワード ―― 日葡辞書、言語学イノベーション、双方向運用能力

Keyword ―― Vocabulary of the Language of Japan, Linguistics Innovation, Interactive competence

1 『日葡辞書』研究を契機として

2016年ポルトガル教育研究機関からの依頼で、世界から「ポルトガル」はどのように観察されているかを解明する研究を始めたが、日本イエズス会による刊本『日葡辞書』（長崎版、1603-1604）を網羅的に分析し、収録される語彙のポルトガル語解説を通じて、イエズス会宣教師たちの日本理解を俯瞰的に捉えようと試みた。

契機として、語彙「長吏」を通じて、幕藩体制確立最初期の仏教界の政策的な弱体化（檀家制度）などを含む政治的な身分緊縛の階級社会によって、身分の固定化を促進し、自発的な行動意識はますます希薄となり、形骸化し、実は内在的に差別意識が一層深刻化した時代を考察することから始めた。また、仏教と神道の神仏習合の抽象的な理論解釈の問題などを、個別の祝祭――難（鬼）遣らい、節分、七夕など――を通じて分析を進め、さらに、様々な同音異義語を通して、日本文化に関するイエズス会宣教師の理解の濃淡を観察したものとなった。

研究論文（ポルトガル語）として、大西洋諸島研究及びグローバル化のためのエンリケ航海王子講座（リスボン自由大学）、ポルトガル語圏・ヨーロッパ文学文化センター（リスボン大学）、マヌエル・アントゥーネス神父文化科学欧州研究機構の三者プロジェクト事務局に提出し、追って刊本化される予定である。

2 現代的外国語教育の観点からみた『日葡辞書』

ここでは、その研究過程で、見出し語3万3千弱、聞き取り調査の時期は「戦国時代」の末期に相当する『日葡辞書』という歴史的産物が、第一級の史料でありながら、現代的外国語教育の全体的な見方をした場合に、過去の遺物として価値の劣化を生んでいると判断した。日本の近世日本語（国語）研究者は知らぬものがいないほど研究価値の高いものであることは周知の事実であり、現代的な録音機材――最新で言えば、IC-Recorder――の存在しない時代に、耳のよいイエズス会士と日本人聖職者たちが4年以上の歳月をかけたフィールドワークによって、当時の九州方言を中心する、都ことばも含む日本語の語彙を、中世･近世ポルトガル語の正書法に則り、精緻に記述したことは、非常にリアリティーを以って、当時の発音が蘇えるという奇蹟を生んだのである。

また天正遣欧使節（1582年-90年）の少年たちが、直面した帰国後の不遇の人生とは対照的に、苦労して持ち帰った当時の最新機器、活版印刷機は、イエズス会士彼らの成果を印行に附することに大いに役立ち、それによって、後世に多くの労作が残ることにもなったのである。

ただ、日本の国語学者にはポルトガル語の解説の部分は不要であり、今や無用の産物として等閑視された。一方、ポルトガル側に立つと、現代日本語の観点から、関心も薄く、ポルトガル語の解説部分に

ついても、謂わば古典扱いになってしまった嫌いがある。

さて、今や食文化を始め、日本文化への高い関心が世界中で沸き起こっているさ中、言語への関心を飛躍的に高めるスタジオ・ジブリの作品などジャパニメーション（クール・ジャパン）の果たす社会的役割は最早見逃すことができない。確かにコスプレやゲーム・ソフトに直結するキワモノも大衆的に高い評価を得ていることも等閑視はできない。こうした波はポルトガルにも若年層を中心に押し寄せている。その耳で覚える「話し言葉」日本語を「書き言葉」のレベルまで高める手立てがないものか模索していた。

今回のリスボン出張――2017年3月2日-3月20日――の中で、毎年開催される観光博覧会初日（15日）、日本大使も大張り切りで、ポルトガル経済産業省大臣を迎える意気込みで、職員に着物まで羽織らせたが、JNTO（観光庁）の現地マドリッド代表――大阪大学法学部1993卒、国土交通省入省、マドリッド日本語学校の運営は厳しいとコメントを残す――、阪急阪神交通社現地代表――単身ドイツ滞在・フランクフルト、現地日本語学校が資金難と指摘――、外務省・時限雇用職員らが、一様にISOの謳う外国語教育（interactive competence）に非常に高い関心を示してくれた。この方々も、下記で触れる林田の『日葡辞書』の現代語化に同意してくれた。

2016年度リスボン大学で開催したシンポジウム参加のリスボン大学生もそうであったが、今回日本ブースを訪問した複数人を見ていると、ほぼ例外なく、映画『千と千尋の神隠し』（2001、2016 revival）を鑑賞しており、それが引き金となって、発行されるジブリ・コレクション作品（音声:日本語,字幕:各国言語）をほぼ鑑賞していることを誇るように自慢するのである。『火垂るの墓』（1988）『となりのトトロ』（同上年）が佳作と高く評価する中年男性もいた。また、三鷹市のスタジオにはどうやって行くのか、そのルートをブース机上の配布物「東京地図」（英語版）で教示を求める来場者もあった。

3　所謂外国語学習 v.s. ISO が謳う「通訳・翻訳の規格化」のガイドライン

所謂外国語学習は、本来双方向能力が問われるものではなく、その対象言語を習得するのを目途としている。日本における欧州外国語学習も基本的に、脱亜入欧を大義に我々も学習してきた。ところが、ISOが4年ほど前に「通訳・翻訳の規格化」を提唱した時に、国際基準に照らした「双方向外国語運用能力」の習得・認証がその主たる眼目となった。これまで、バイリンガル話者でなければ、無理ではないかと思われてきたものの、グローバル規模でその挑戦は始まった。

既に「医療通訳（医療言語学によるイノベーション）はグローバル社会との「共創」によって世界の扉を開く」（*Co* Design-1*,大阪大学COデザインセンター, 2017.3, pp.85-102）で言及したように、CEFR：Common European Framework of Reference for Languages（ヨーロッパ言語共通参照枠）による能力（熟達度）別レベルの、6段階の「中上級」にあたるB2以上になれば、Interactiveでdeductive（演繹的：応用の効く）なレベルまで達し、Contextual Sensitivity（文脈を汲み取る感

性）に拠って、「双方向外国語運用能力」は担保されると判断される。外国語系大学（学部）において、日本の大学設置審基準の「義務的」学習時間で、予・復習を含む約2,000時間を超える外国語学習時間によって、学習者母数の5%ほどが「双方向外国語運用能力」に達すると考えられる。

勿論、すぐに実力が発揮されるとは限らず、スタートに立てる段階で、数年現場で鍛えられることによって社会的に認知されることになるだろう。Medical Linguistics Innovation研究会（COデザインセンター，社会イノベーション部門：林田雅至主宰，会場：うめきたナレッジキャピタル・ナレッジサロン）の主軸である印南敬介（ナレッジキャピタル所属：プロデューサー補佐職）は、「高度外国語交渉」能力に長け、2013年ナレッジサロン発足以来、4年間で90件に及ぶ、「双方向外国語運用能力」に立脚した交渉を重ねている。目下は、Technological　Linguisticsにおいてプロとして十分な資質を備えた段階に達成したものと思われるが、今後はMedical Linguistics領域の「総合コーディネーター」を目標にさせて、鋭意指導を積み重ねていくつもりである。

ところで昨年2016年はポルトガル語の教育が始まって100周年で、10月1日には母校で「国際シンポジウム」が開催され、その中で、私は「日本としてはISOの国際基準確立の立場に立って、グローバル・ポーチュギーズの確立と同時にグローバル・ジャパニーズの確立も目指すべき」と見解を述べた。

ここで言う「グローバル・ジャパニーズ」とは、日本語のアルファベットは「ひらがな」とし、表記上、漢字、カタカナにすべて「ひらがな」ルビを附するというものである。これによって非漢字圏の国々の人々にも、広く「グローバル・ジャパニーズ」の学習・習得が容易となり、世界中で様々な日本語バリアントが誕生することになる。国際化の視点から、それは大いに歓迎すべきことである。

なお、「グローバル・ジャパニーズ」について、上記にも言及した観光庁は推進派であるが、文科省は否定的である。その理由はワープロ普及で、日本人の漢字力が低下し、これによって、一層由々しい事態を招きかねないという懸念を示している。残念ながら、非常にドメスティックな発想に過ぎないと言えるだろう。

4　『日葡辞書』現代語化作業キック・オフ

昨年度、冒頭で述べたようにリスボン・サイドからの要望に応えるべく、『日葡辞書』の分析をしていた（今も継続中）。3月リスボン滞在（3.2-3.20）では、先方の友人大学研究者らと意見交換勉強会になった。課題の80枚原稿（ポルトガル語）も脱稿し、リスボンサイドへ渡している。

論文の趣旨は、見出し語日本語（ポルトガル語綴り字）の部分も、説明解説（中世・近世ポルトガル語）の部分も現代語化して、ポルトガルの場合、日本学研究者だけでなく、スタジオ・ジブリの作品などで慣れ親しむ日本ファンの現代日本語のレベルをアップさせたい。日本側は、日本の事をポルトガル語で表現する力を身につけたい。後者は、日本人が外国語ポルトガル語学習について、日本語からポルトガル語

への通訳・翻訳の能力を鍛え、高めるという意味である。

従って、現代外国語学習教材として、位置付け、ISOの提唱する「双方向外国語運用能力」の滋養のために、活用できるような資料として現代に蘇えらせる試みである。3月17日昼食後、科学アカデミーに地下鉄で向う途中、辞書学（語彙論）の大家である恩師ジョアン・マラカ・カステレイロ（1936-）はすぐにその趣旨を汲んで、来年科学アカデミーで発表して欲しいと促すのである。[1)]

5 『日葡辞書』現代語化・事始め～日本語基本動詞のまとめ直し

16世紀半ば頃、「紅葉狩り」と並んで「桜狩り」があったことも分かり、古代語（最重要語）：行なふ（voconŏ）、商なふ（aquinŏ）、呪（まじな）ふ（majinŏ）をベースに、「なふ（=に合ふ, に合わせる）」が接尾辞として独立し、間投詞「いざ」（izanaŏ）、名詞「荷」（ninaŏ）、「とも（伴）」（tomonauŏ）、「訪, 音」、「占い」（vranaŏ）などに接続し、現代語まで延命したものもあれば、中世語「おと（訪, 音）なふ」は同時代に「訪, 音ずる」と競合する。後者が延命し、近世語「訪ずるる」（vtozzururu）を経て、現代語「訪れる」となるが、靴音などで気配がわかる意から、「音」なふ、「音」ずるはいづれも風情が感じられる。「通い婚」を想像すると、官能の香りすら匂う。言霊である。これらポルトガル語綴り字はいずれも『日葡辞書』に掲載されている。極めつけは「甘なふ」「和（あまな）ふ」（amanŏ）である。さて、日本語例文にFiga xocuni vomomuite xiquauo amanŏ.とあり、「飛蛾燭に赴いて、死禍を甘なふ」。今風には、「飛んで火に入る夏の虫」に相当する。

6 『日葡辞書』現代語化・事始め～ metathesis、同音異義語を切り口に

「ぶつやき」（butçuyaqi）は当時のポルトガル語の綴り字であるが、現代語「つぶやき」（tçubuyaqi）は当時も使用されていた。これは言語学的にmetathesis（音位転換）と呼ばれるもので、『日葡辞書』にはxitatçuzzumi、sanzaquaのみで、metathesisによる異綴り字xitazzutçumi、sazanquaはエントリーされていない。現代語では本来のsanzaquaは廃用になっている。「舌鼓」「さざん花」のことである。

metathesisから歴史が垣間見えることがある。フェイスブック・ザッカーバーグの片腕で、現在も名目的に創設者として名を連ねるものの、既に袂を分かったエドゥアルド・サヴェリン（Eduardo Saverim）が存在するのを、特に映画「ソーシャル・ネットワーク」に負うところが大きいが、知る人も多いだろう。実際、時代の寵児の出自は、ユダヤ系ブラジル人で、姓そのものSaverimが、15-16世紀イベリア半

島でキリスト教への強制改宗抵抗者ユダヤ人で国外追放されたセファルディム（Sefardim）という言葉の歴史的音声変化したものである。Sefar-の部分について、母音間に挟まれた-f-が有声化し、-v-として、sevar-となり、同時に末尾-dimについて、語末-m（両唇有声子音）が直前母音-i-に影響し、m音そのものはポルトガル語の発音規則から無音化し、一方-i-の鼻母音化［ĩ］（イン）を促すことになる。その影響下で、子音-d-が硬口蓋化（半母音化）し、舌先が口蓋から離れて、-i-に吸収され、強勢（強調）アクセント化が弾みを生んで、前半部分Sevar-にmetathesis（音位転換）を起こして、最終的にSaverimになるというわけである。

ところで、『日葡辞書』WikipediaHPの影印本（editio princeps）電子資料の中に、同音（Sosai）異義語：粗菜（粗食）と粗細がある。後者の「全体も、細部もこなせる」意味には驚かされた。「全体最適化」と「部分最適化」を両輪で思考したり、行動したりするということになる。現代語では一般的に「微に入り細を穿つ」であるから、近視眼の極みになる。また、粗菜（粗食）は、現代語では「粗茶」と謙遜して、客にすすめるということになっている。

ちなみに、本来ならば、認定証書（英語版）によって期せずして、ISOの意向に即した「中之島医療通訳養成コース」のように、「全体最適化」の広域グローバル・ビジョンが必要なのであるが、今回は外国籍生徒が大多数化する商業地区、大阪市中央区心斎橋の南小学校を舞台に、「部分最適化」で、派遣先窓口を「中央区」（今年度より予算執行権有り）として、そこに絞り込んで、コミュニティー通訳育成を図ろうという試みがある。グローカルなレベルで、コミュニティー通訳公的認証――認証委員会：アカデミアは大阪市立大学、市教育委員会、大阪国際交流センター、有識者：水野真木子（ISO「通訳・翻訳規格化」ガイドライン・日本委員、本年度より上記「中之島医療通訳養成コース」通訳技術論担当）、印南敬介（ナレッジキャピタル「プロデューサー補佐職、interactive competenceを備える近未来スマート社会のコミュニケーター、林田など――を発行しようと考えている。小中学校の教育現場（外国籍児童生徒問題）の知見の高い方も関わることになる。COデザインセンターは監修機関として、社会実装の実績になればと考えている。[2)]

そうした多文化・南小学校校長先生のコメント（2017年2月25日）で、フィリピン人保護者の結束化を妨げているのが、同業者的利害関係で、玉造カトリック教会も解決できないと伺った時、『日葡辞書』の下記語彙に思いあたった。

Feôxô. Gaguefeôxô. 日本語例文：Fitono cataqi cocoromo goPassionno quannenuo motte gaguefeôxôto toqevataru.（人の難き心も御パッションの観念を以って瓦解氷消と解けわたる）

Passionは、そのまま音写された「殉教」のことである。要するに、カトリック教徒であれば、教会内で虚心坦懐に中央祭壇にある「イエス・キリスト磔刑像」に御祈りを捧げれば、心が融和されて、寛容の精神で満ち溢れるという趣旨である。それにしても「瓦解氷消」は非常に興味深かった。現代語では解毒（guedocu）、解脱（guedat）、解熱で、その「解」の「げ」音は残る。[3)]

7 『日葡辞書』現代語化～重要同音異義動詞の場合

次に『日葡辞書』の同音異義動詞を取り上げてみよう。Muſubu と Muſubu（Sucŭ）である。

前者は「結ぶ」であり、成句として、縁を結ぶ、縁辺を結ぶ、即ち結婚する（¶ Yẽuo muſubu. I, yẽpẽuo muſubu. caſar.）、庵を結ぶ、小屋を造る（ ¶ Iuoriuo muſubu. Fazer choupana.）、実を結ぶ（ ¶ Miuo muſubu. Dar fruito a aruore），また文語として、印を結ぶ、つまり異教徒（日本人）が習わしとして、手で様々な仕草をする、あるいは儀式を行う（S（escriptura） ¶ Inuo muſubu. Fazer com as mãos varios meneos, ou ceremonias como cuſtumão os gentios.）とある。

また、見出し語「縁」（Yen）には、成句「縁を結ぶ」の説明があり、「人が現世において行なう善行、徳行によって因果関係を結ぶ」として、この意味において「二人が結婚する」ということも了解される。（Yenuo muſubu.i, Contexer e cauſas, por obras boas, & virtuoſas, que nesta vida hum homem faz, &in hac ſignificatione videtur poſse intelligi, que o caſarem dous, ſe diga Yenuo muſubu.）

さて、後者の「掬ぶ（掬う）」の成句として、水を掬ぶ、手で水を洗う、また、井戸か川で水を汲む（ ¶ Mizzuuo muſubu. Lauar as mãos com agoa. ¶ Item, tirar agoa do poço, ou rio.）とある。関連見出し語として「結・掬び上げる」は、縛るか、結んで上へ上げるとあり、また比喩的に井戸（仏教用語：閼伽井）か川から水を汲む、と説明し、例文を『平家物語』巻4に求め、Tomoni acano mizzuuo muſubiague, fitotçu fachiſuno yẽto narŏ.（ともに閼伽の水を掬び上げ、一つ蓮の縁となろう）と引用し、その意味を「神聖なる水を汲み上げて、ともに同じ蓮に寄り添って、ともに救われよう（Tomando agoa que era como benta, juntamente ajuntar nos emos no meſmo golfão. i. Saluar nos emos.）」としている。

さらに、Aca, I, Acano mizzu（閼伽、または閼伽の水）を見出し語として、「早朝に仏に供える水」（Certa agoa que polla manhã cedo ſe offerece aos Fotoqes.）とし、「閼伽掬ぶ、または閼伽の水を掬ぶ」（意味：閼伽の水を泉や川から汲み上げる）という成句を紹介している。註釈的に見出し語「閼伽棚」（Acadana）について、「坊主が早朝、偶像に供える水の容器（仏教用語：水瓶（すいびょう））を載せておく机や置物台のようなもの」と翻訳している。

閼伽は仏教用語でサンスクリット語argha の音写で、仏教用語：功徳水（閼伽香水）と訳される。仏教で仏前などに供養される水で、六種供養の一つとされる。

8 『日葡辞書』現代語化～重要同音異義動詞の語源について

一見同音異義語に見える二つの動詞であるが、その語源的関係性を見てみよう。

結ぶは「むすひ」に由来し、（ウ）ムスは（産）ムス+ヒ（秘, 霊）=産霊である。万物は「むすひ」の働きで生（産）まれ、発展する。日常語「むすこ」（男）、「むすめ」（女）は派生語である。

日本神話の「カグツチ」の別名に「ホムスビ」（火産霊）がある。イザナミはカグツチを生んで絶命し、激怒したイザナギは「ホムスビ」殺害を試みるが、殺しても殺しても新たな「神」の誕生がある。生命の連続性を象徴するものとして、産霊の連続性から「結び」「結ぶ」が派生する。

一方、「匊」を元に花弁が丸く咲く「菊」（平安時代は花の総称）と、「手を貝殻状の形にして」掬ぶ動作には、小指と小指、両手の側面を合わせる動作「：結ぶ=掬ぶ」が必要となり、両手が球形状になる。掌を球形状に「結ぶ」ことから、掬水が可能になる。水を介して「産霊」が体内に入り、「禊」（清めの儀式=浄化・水の洗礼）となるのである。

ところで、中国の「掬水月在水」が、平安期に縁側で（月見）餅を食しながら、盥に浮かんだ月影を愛でる貴族的「雅致」に変容する文化現象は、よく知られるところであり、「匊」は本来、米を包み抱える意味で、コメが球体（月）に収まっている（白色）イメージから、「十五夜月見兎餅伝説」は派生したとも言われる。元々、月と密接に結びついた「ひきがえる」趣味は、日本では江戸後期（1806年）「読本」に登場する、蝦蟇の妖術師、架空の盗賊・忍者自来也（児雷也）に残っている。

「掬水月在水」に関連して、紀貫之（872-c.945）の四季をタイムスリップする名歌：袖ひぢて掬びし水の凍ほれるを春立つ今日（けふ）の風や解くらむ（『古今和歌集』第1巻、2、905年刊）があり、「本歌取り」した藤原長能（949-c.1009）の「月」ではなく、「天つ星合」に変わる華やかな貴族趣味に溢れた俗謡：袖ひぢて我が手に掬ぶ水の面に天つ星合いの空を見るかな（『新古今和歌集』第4巻、316、1205年刊）がある。

言語学的に、両歌に現われる、貝殻状にした両手に石清水を受けるという「掬ぶ（=結ぶ）水」という動詞表現は、『日葡辞書』（17世紀初頭刊行）など、中・近世まで使われた動詞であり、現代日本語にはこの動作を「掬ぶ=結ぶ」とは言わず、nonverbalにしか表現できない。保育園・幼稚園の先生方が子どもたちに両手の動作を示して、こうして蛇口から水を飲みましょうと伝えている。動詞の欠落現象である。

こうした同音異義語について意味上のdistinctionに関して、当時ことばの狩人としてイエズス会士たちが語彙蒐集において環境的に難しい側面もあったものと思われるが、一方で、interactive competenceの観点から、日本人聖職者たちがカバーしていたにせよ、ポルトガル語から日本語への通訳・翻訳する技能には一定の限界があったものと想像される。

上記の「天つ星合」に関して、具体的な記述は続く。見出し語「織女」（Xocugio）、「織姫」（Vorifime）を見出し語として掲載し、「絹織りの女工（Tecedeira de ʃeda）と語釈し、「中国の

詩人は、月を見ながら物思いに耽っていた二人の織姫が、これら二つの星に転生したのだと伝説を説く」（naſ quaes estrellas fingẽ os Poetas Chinas que ſe cõuerterão duas tecedeiras que eſtauão ſuſpenſas vendo a lũa.）

見出し語「牽牛」の例示に「牽牛織女すなわち、七夕. 二つの星で、その一つは天の川の末端にあり、もう一つは先端にあると、詩人が言及するもの」（Qenguiŭ xocugio. i, tanabata. Duas eſtrelas（aſsi chamadas）de que falão os poetas que eſtão hũa no cabo, & outra no principio da via lactea.）としている。

また見出し語「七夕」を以って、七夕祭り（Tanabatano matçuri）として、7月7日の祝祭と定義する。見出し語「銀河」（Guinga. i, Amanogaua. Via lactea）や、雅語「星の林」（Foxinofayaxi）や「門渡る船」（Touatarufune）まで念入りに掲載されている。

漆黒の天空に浮かぶきらきらと輝く銀色の帯に感激したイエズス会士たちの高揚感を推し量ることができる。

9 『日葡辞書』現代語化～「節分」の記述

次に「節分」について扱おう。以下の「見出し語」で説明がある。

1. 節分（Xetbun）「時を分かつ。年末ゼンチョ（異教徒=日本人）が行なういくつかの儀式で、家の中で炒った豆（Mame）を悪魔に向って投げつけて外へ追い出すもので、鬼（Voni）（すなわち悪魔）は外、福（財宝と幸運の神）は内と大声で叫ぶ。正しくはXechibunである」
2. 豆（Mame）「日本の豆、大豆」（Feijões, ou grãos de Iapão.）
3. 鬼（Voni）「悪魔、あるいは悪魔として立ち現われる恐ろしい存在」
4. 難遣らい、または鬼遣らい（Nayarai. I, Voniyarai）「ゼンチョ（異教徒）が年の初めに行なう儀式［正月（Xŏguachi, Xŏguat）あるいは 履端（Ritan）「年の最初の月」］。家の中で炒った大豆を宙に投げ、その後、各自の年齢の数だけ大豆を食べ、それは悪魔が家に近付ないようにするためである。

古代の宮中儀式に「追難」（『日葡辞書』に見出し語なし）があって、漢字だけ見ると、Nayarai. Voniyarai に相当する。この「追難」は大晦日に実施され、目的は病気・疫病の象徴である鬼を追い払うことであった。平安時代中期に編纂された、格式（律令の施行細則）『延喜式』（905-927年、967年より施行）、第16巻に、舎人（天皇の警護）が鬼の役割を演じ、宮中の4か所の扉を逃げ回る。大舎人は、四眼金色面を被り、黒装束で赤袴をはいた方相氏（儀式の統括役）となり、大矛を右手に持ち、左手に楯を携える。紺色の衣服を纏い、紫色の冠を被った20人の侲子（振り鼓を鳴らす稚児）を従える。宮中に入殿を許される公卿（最高位階の幹部）の中から、桃木製の特別の弓で矢を放つ者

が選ばれる。方相氏の援護として、鬼を払い、悪霊が宮中に入らぬように矢を射たのである。

西漢（西漢）時代の中国の天文学者、歴史家、編集者であった劉新（中国名：劉歆）（生没年：紀元前46年頃から紀元後23年）によって形式化された儀式に由来する。

797年上梓された『続日本紀』第3巻に記述され、日本で初めて行なわれたのは、文武天皇在位（683年 - 707年）に蔓延した疫病の折で、西暦706年大晦日の夜であったとされている。後代、吉田兼好（1283年頃-1352年以後）著『徒然草』（序段を含めて244段）の第50段及び第203段に言及がある。15世紀初頭になって廃止されたが、今日いくつかの地域で実施され、また多くの場合、「節分」として2月に行なわれている。

一方、14世紀末、鬼を豆で追放する民間祭事「節分」が徐々に浸透している。「節分」は本来季節の変化、過渡期で、「時を分かつ（Toqiuo vacatçu）」もので、1年を通じて、春夏秋冬それぞれの季節、四節が存在したのである。各節で祝祭が行なわれ、その後、「節分」は排他的に春到来の前夜、2月2日か3日を指し、冬から春への過渡期に祝われることになる。

実際、「追難」と後代の「節分」の実施時期の異同はない。「追難」が宮中で行なわれた時、グレゴリオ暦と異なる中国の伝統的な暦（太陰暦）に従っていた。「節分」が人々の間で広まり始めた頃は概ねグレゴリオ歴に近い暦が採用されていたのである。

ただ「節分」は17世紀初頭から19世紀半ばまで12月に祝われていた。「節分」はある地域では年末から年始にかけて実施され、ある地域では12月31日から小正月にあたる1月15日の間に行なわれていた。

それ故に、イエズス会士たちは、年末大晦日、民衆的なXetbunと宮廷的で高貴なNayarai（Voniyarai）という二つの名を持つ祝祭に人々に交じって参加し、新年を迎える歓喜に浸り、幸福感をともに味わったのであろう。

ただ、イエズス会士たちが達意の日本語話者とは言え、やはり、ポルトガル語から日本語への発話能力には限界が見受けられ、「三途の川」などの誤解があったり、現世利益の仏教的日本死生観は、現世「外」的利益を追求するキリスト教死生観と、所詮平行線を辿る。究極の「悪人正機説」はキリスト教陣営には、予測も出来ない倫理観であったろう。

10 エピローグ～今後の『日葡辞書』現代語化の記述作業

今回は、『日葡辞書』現代語化の記述作業のイントロダクションを行なった。引用したローマ字綴り字は、当時の中世・近世ポルトガル語の正書法に準じて記述されている。ヘボン式などに改める必要性もあろうが、検討の余地はあると考える。今後は、今回の記述作業を基礎に個別の緻密な記述作業が求められる。個別具体的な記述と体系的な記述を並行してすすめていく必要があるだろう。経験的に

は前者を先行させながら、ある時点で立ち止まっては全体の枠組みを構築しながら、またある時点ではその暫定的な枠組みを再構築していくことになるのである。所謂アウフヘーベン（止揚）である。

註

1）リスボンポルトガル・アカデミーとの関係については、下記を参照：

http://conso-kansai.or.jp/mt_news/2016/04/2015421.html

2）大阪市中央区心斎橋南小学校：

http://swa.city-osaka.ed.jp/swas/index.php?id=e551131

http://www.huffingtonpost.jp/2016/06/08/symbiosis-in-osaka_n_10354262.html

大阪国際交流センターは年度末外国籍住民子弟のために下記事業を実施：

http://www.ih-osaka.or.jp/i-house/28preschool-press.pdf

http://www.ih-osaka.or.jp/news/20161202_3845/

3）「玉造カトリック教会」：

https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E9%98%AA%E3%82%AB%E3%83%86%E3%83%89%E3%83%A9%E3%83%AB%E8%81%96%E3%83%9E%E3%83%AA%E3%82%A2%E5%A4%A7%E8%81%96%E5%A0%82

http://www.geocities.jp/general_sasaki/tama_kyokai.html

（投稿日：2017年5月8日）

（受理日：2017年6月26日）